

新古今類要

石達少翁著
庚寅仙因

十

8 7 6 5 4 3 2 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

石浦水若宮詩合

寛喜丁年三月廿五日

題

河上霞

暮山花

社迷懷

作者

龙

三位行權中納言藤原朝臣家

三位行權中納言藤原朝臣家光

參議三位行右兵衛督兼伊豫守藤原朝臣為家

三位藤原朝臣家隆

三位藤原朝臣知家

從三位藤原朝臣範宗

散位正四位下藤原行能

從四位上行右近衛權少將藤原朝臣伊成

從四位下行右近衛權少將兼因幡守藤原朝臣親氏

從四位下行右近衛權少將藤原朝臣賴氏

散位從四位下藤原朝臣顯氏

正五位下行洛部權少輔兼春官權大進藤原朝臣經光

正五位下中務權大輔藤原朝臣為繼

從五位上行侍從藤原朝臣隆祐

正六位上行龍兵衛權尉源朝臣家清

法平大和尚位昭清

正六位上行右近衛將監大神宿祢式賢

右

皇大后宮大夫俊成卿女

從三位行權右中弁藤原朝臣光俊

正三位行兵部卿藤原朝臣成實

女房下野

前權大僧都法平大和尚位幸清

正三位下行龙京權大夫藤原朝臣信實

法平大和尚位覺寛

日吉祢宜從位上行大藏少輔祝部宿祢成茂

女房少將

前但馬守從位上源朝臣家長

從位下行右馬權頭源朝臣有長

法平大和尚位耀清

沙弥明教

女房但馬

太田祝賀茂縣主季保

法眼和尚位信忠

沙弥宥身

講師

中務權大輔為継

讀師

三位知家

判者

權中納言定家

一番 河上麗

權中納言定家

ヨウリナシカツハシタヒトミタナレテ益ホシヒキマレバム

右勝

後醍醐女

轡
娘ひうくれわきおねむて爲めらを宇治の川の方
庄奇老耄くねむせ往年久候翁人じ父數
ゆん 勅使く行旅時代雖隔景氣未三
依終常懐愁以詠吟擣娘く神霜む姫艷之詠
也可為勝

二番

龙持

權中納言家光

川舟うゆまされ江とすく浪のあそへすこよれあまりの

右

光俊卿

石謂水

四

あともかくよきものありて居りぬれば
たゞやうじへまづ難であるが

三卷

右共衛皆為家

もひらめくにむかひと棹せうれりあゆともあまう那
右
長鄰卿成実

卷之三

九

やう舟うきあみをわくま
のとひてお川な

卷之三

正三位家院
あそびのとく

わきの山をよしや鹿乃高瀬川をくわくとれ
たよるみのまづりのうめの事す行けぬか
くせひゆきのむかしのうめのうめの鹿
田川のうめのうめのうめのうめのうめの
うめのうめのうめのうめのうめのうめの

五
番

正三位知家

卷之三

風うきてあらそ宋舟北江
うきてあらそ宋舟北江
ありまか川なまくまく
ありまか川なまくまく
くあらそ小島あらそ
くあらそ小島あらそ
もあらそなまくわ行方ノ
もあらそなまくわ行方ノ

卷之二

石川
水

卷六

九

後云位範家

志乃秋吉ノハアシヒタリモテナシ

卷之三

卷之三

七
卷

尤持

行能狐語

わ
く

卷

汝不覓寃

立川をもとめり
あらわすやうに
あらわすやうに
あらわすやうに

八
卷

龙勝

伊麻孤居

卷之二

七

麻衣宿稿

あくやなれ柳のあみから氣味もぬきあらまち
ちかうにかづかんまへりとひがひのわち
ゆあわや題ひあは中山内職ひよひ
らとこまゆとあひのゆりてよひすてひ
うきひてやといふのをゆうたれ

川寧使
相之方之
其

五
青
木

九番

左持

親氏朝臣

秋もとも花れあきひ立田川裏もれわうすとあま
右

女房少将

まわらふとすみにうまれますもむらすみのまなでぬま
立ち風情とさかへしてことはすうくわ
くたをすうとよどやどくわざりひなま
もくくねすみはうもひうわすうかと
よやゆるし

十番

左

頼氏朝臣

あさまにひめれわく白浪へ立田川とよろづく

右勝

家長朝臣

こをいはどちらさんやまくわんあれあら神そちうく
すこひらおともうあらそんとはゆうよす
ゆきれども川ともあおらもく人すく非九
條く艸を抜群く氣為傍

十一番

左

顯氏朝臣

たを海ゆまつらとて處れだてふうすとよと川おき

右勝

あも朝臣

さう川處の神のそれうくまくよつて表を書け
たをせれ彼あくまくあくがりとれあ
不奇のうとゆのひくもくうりううかく
ゆといひうとくはうくまくわれも

猪

十二
香

虎
持

綰光

右
清下釋

右

清江題跋

十三

龙膀

名錄

右
波彌明教

卷之二

卷之三

十四

丸
脯

隆祐

かあてにましんひ黒やうすい顔とほうそくの門を

5

九
九
九
九

十五番

龙
脯

源家清

遠とひゆうてえまくなうゆに轟玉うるを流乃川舟

石

賀茂季保

山風や處か見なすを若鷲川あらゆの花乃冬そく色わ
左手を難ねむひもきうせりひもあくとも
小あく波えそくのとあもよもよもとくまうとも
ようほ初み文字ひやのまくわうひてきこのや
のまとたふとくわほづやきほま
山風やとく祀やとくとくわけよけりひと
とくとくわけよけよけよけよけよけよけよ
うトハやのまくわう禮不知お越お見以左あ務

十六番

丸持

法界眼清

若鷲川あらゆの美やうれんあまく美むせられん

右

洁眼信忠

よくすじ木のやまく川のなまこを轟せぬだつむ
くちやなうくらんといふとくも和漢まくま
めりくわくらんをしうかと休くま
但う依禮可定三却え木のやまくすまじよ
うりてうれすこりくわくもだじもわ不得
ん不審ねぐるく

十七番

丸

大神武賢

ようて轟れ夜立田所美乃えよ活もまくらん
右勝

沙汰寐身

高羽川せたゆうへりくまく轟め兒はね轟れあけの

たすきを難ねむあくす於檜中納く小跡山莊伊勢

而詠之れれれ依徳は道可賞其源昔能因下
車忽殊路頭く結松今微臣染筆重輕游
漱く餘流仍為傍

十八番 暮山花

龍

宦家

すれりあみ山乃梯きやややや我乃父乃義也むうりを
右勝

俊成卿女

月夜えうれうむよウリクヌセタとあらそみうへれ山
たすく久作宗廟く冥鑑適浴聖朝く天恩雖
恥老耄く至極於茲信心く不空總述す志更
非宜祠

十九番 有才可謂妖艶く豈足于握觀為勝

龙 家光

右勝

光俊

易てど丸山多くあらなくふいが日くとみりまくや
左 情虞淵く景思魯湯く蹕風情有其
真但古奇深洞殊得其膏叶雅頌之艸仍
行うらうらうらし

二十番

龙

為家

ゆくあつむ下せれ夕つひううよまにくうく山うと
後拾

右勝

成寔

さくらえの雪れどその山風よ花かきれども見
けくらむとくよれどもむれめこれぬま

とその義をかうりてまくらへまくらを
ちひむからしゆん

二十一番

龍勝

家隆

山のともと有れけき山すみめの花さうりうる
右

下野

うそ又そくせ縫のへあひよひやせまうる山
あらうくうきりくかひのふとけう
らきゆもとたすりすらあれこれさうりうる
き振神ぬ黒とひすまややくじむ可
為務

二十二番

龍勝

知家

なりやの花まくら道や山拂日とすれ称よしよしよし

右

幸清

三吉野の里をこほや山さうタゆうすにしほう
ああむれをもあくきえゆきこと日を
すれ称よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ
くゆれと為務

二十三番

龍勝

範宗

山のみの揚とわざくくまくとあがめまつ

右

信實

もうまひそらり分やうふ拂タわうとのまくまく
ひんりかづくまくまくりとくらうひくまく
えゆくまやタのりゆくれまくまくても

お／＼くま／＼くわ／＼とさ／＼ひ／＼か／＼
あ／＼き／＼と／＼は／＼も／＼う／＼ね／＼わ／＼た／＼方／＼勝

二十六番

龙勝

行能

わ／＼す／＼じ／＼風／＼月／＼う／＼み／＼け／＼

右

覺寛

擣／＼山／＼と／＼れ／＼な／＼す／＼そ／＼や／＼ま／＼ま／＼か／＼光／＼け／＼
風／＼う／＼す／＼り／＼ミ／＼シ／＼け／＼と／＼と／＼そ／＼山／＼擣／＼
き／＼れ／＼な／＼そ／＼せ／＼や／＼は／＼催／＼感／＼歎／＼恩／＼
と／＼う／＼き／＼モ／＼れ／＼け／＼モ／＼サ／＼マ／＼ト／＼う／＼ゆ／＼よ
ゆ／＼と／＼左／＼行／＼秀／＼え／＼神／＼勝

二十七番

左

伊威

約／＼人／＼よ／＼こ／＼れ／＼ね／＼空／＼様／＼花／＼も／＼な／＼う／＼か／＼よ／＼日／＼く／＼す／＼し
右勝

威威

名／＼よ／＼ほ／＼の／＼ふ／＼か／＼う／＼山／＼の／＼う／＼て／＼と／＼花／＼よ／＼や／＼ま／＼り／＼ゆ／＼れ
た／＼や／＼に／＼ま／＼れ／＼な／＼人／＼す／＼ま／＼ら／＼き／＼り／＼と／＼ゆ／＼
ひ／＼ん／＼す／＼ば／＼や／＼れ／＼下／＼れ／＼勺／＼す／＼う／＼つ／＼ひ／＼わ／＼せ
られ／＼な／＼そ／＼う／＼や／＼わ／＼じ／＼る／＼う／＼も／＼わ／＼モ／＼
ゆ／＼き／＼し／＼あ／＼勝

二十八番

龙持

親氏

擣／＼う／＼か／＼城／＼山／＼乃／＼と／＼花／＼よ／＼山／＼

易／＼う／＼む／＼か／＼う／＼や／＼き／＼あ／＼び／＼山／＼も／＼す／＼山／＼風

ち／＼あ／＼え／＼れ／＼難／＼く／＼わ／＼れ／＼も／＼持

二十七番

左 胸

賴氏

老翁山タカリ雪と秋色小さく霜あり花さくさが節
右 家も
ひさくにかぎりをばしらきれいもあれ山のむろ又
たゞくほとやくゆうことにようぐくまこと
きとそとは山タカリ雪と秋色小さくさが節
山とも猶ゆべ

二十八番

左

頼氏

りやさづ花さくすよ草くわくうのそひとくは

右 胸

久長

うれ山鳴むけりむかわせやつるふゑれまくとく食

二十九番

左 胸

經光

は里ち揚そらきとれをゆりとひじめタクのを

右

耀清

あえやねんそきあきタクのまきれ山の花あきみ
あんあゑあ小ねくくひとうえやうとく
きのまうあれ山をうのひくくへまことれ山よ
あくゆくむはむはむは

三十番

尼持

高繼

山櫻あさきのまれ風よした夕つやもろそらすも

右

明教

書ぬとぞ祀すとかくもうとひらとこうとし人てこりがふ
みれりの夕風情よもあわばじろんをや
んわくこれゆのりといふくもくくや友
ありわくうきわくわくわくわくわくわくわくわくわく
わくわく

三十一番

尼持

あすた

初寒山ゆすひからくならまにみのよき花めぐらす

右

但馬

うきやうきめうてきかきくひたまの裏めむの壁も

くわせ山のゆすひからくぬれうねうすうすう
うねうねうねうねうねうねうねうねうねうね

三十二番

尼持

家清

山陰山すそれ時のむれえをねねすてあく

右

李保

蒸れりうねうねうねうねうねうねうねうね
ひけりうねうねうねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうねうねうねうね

三十三番

尼勝

昭清

あつこしてあつこれうねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうねうねうねうねうね

右

信忠

卷之三

廿

とおふきいづれかくまとを構ひうちぬタクのえ
たゞまのやうあとづけタクられのえ平懷うち
あは山ゆき野ゆ

三十而壯

大賢

右
寒身

卷六

もとあれども見ゆれども
色あざやかあるも見えゆふ
ゆうべはまことにあたへてうらや
め

三十不齋
王夫之

九

空家

右
膀

俊威卿女

右勝
俊成卿女
あのえあづまのとすみゆく
あひうれうそのはやと風て

卷之三

家光

右
み有

二

たましにあつてゐる時のひづかしさをもとめると、この三
月の月日は、やまとわの月の月日とされ、ゆう
あとのは、よくよと、りくらむれでや
とあるが爲

五清

三十七奇

七
奇

名家

左
右
底

卷

卷之三

わざわざまわらひてらるのえ
あ首を折るがれ

又首重精勤者也

卷之三

尤持

家隆

うすうてまうれいのむらに
下野

七

卷之三

もひきぬくやあ社も見え又難矣

卷一

尤
知家

卷九

卷之三

卷之三

乾家

やまと

四十一番

龙

行触

ひづかまきとひそらめこねひとのむせ

右勝

見寛

あくられむらとやめいとうあふくぬりからひきり
たてはすこゆうのへゆることたるくとも
ひらとやすすゆく一冰拂つきのくぬみぬ

えん

四十二番

龙持

伊成

ひづく水むすなをふうきて行せりはすふとあくも

右

麻屋

よすすれたのと、かうけされうね拂ひりように

たちを拂方

四十三番

龙勝

貌氏

君う代とれきの御もすひじきよゆまちにうふと

右

サ将

みとうへやせしもとしー御もやれきくうふとそ

たこすよわ勝

四十四番

龙

どうやうら

後のせいやまとくと八幡山神のすれあう月の月

やう山神やまうきじとうみやしてさもくらのちえ

たのうこそゆうとくはゆりへーたのうく神やさ
とまんべうとくはやうよよめくも
とのけなつてつるくえんけれいうちわ
てやや

罕み番

龙持

たまうち

昔よりまよひかれのる清あふくぬみよといふまよひ

右

ちく長約居

まよすほよくぬみよひつありうこくふきよまよひ
いそくあよくぬけ代をくも優芳丸

罕六番

龙

はゆみ

やつこ山行祚をくふ引をじむくよわくぬまよひ

罕十番

右勝

幸清

わよこ山行めくふすすがよ浦のちひくあらかなれやを
あら波祚うれうりいのどさんとくもと下れをも
んすく不相應やもくじんすく礼聽れ
聲視れ互欣不登高不深深たれまれを
くやゆくじむくも理て御み傳

罕十七番

龙持

あめはく

かくすくおれぞくいもくあらわうまとわられやもみよ

右

明教

くまそくよとくひくじ男山あられとけようきせぬれ
くましほせがくいとひくうけひたれとくちく
ゆうりすのえゆきともおれ

四十八番

左持

さすけ
さすけられくとまゆやと、ひきうち附とくぬめ
右

但る

いもー水すみかれる、紙とてよ祚れちひのあられや
ばたひよ、船あ得失くわくねいあお

四十九番

左勝

家清

あらきをむらひときのひみやねとすよむ繋りわせや

右

祚ちゑん人乃くとつもあすじとふうむわれやう

祚いたくは宣詞人乃くといもくとく

きこえとくらわゆ

五十番

左勝

眼清

まくあひくくさくのまくまくまくまく

伝丸

すそゆきさりれすくろ男山あけのとの毛色だく

もくもりのまくわいすくのまくまく

想ふ其のまくまく

五十一番

左勝

式賛

れどこまむれやまとくうよけひとまう老あれまよと

右

わらゐじ神代あら拂ふけてとわあけまわけま

たかすとも難あしきうによ下せてつけまわけ

文子とめうらしもくふくわいひそり
さまほひともうらしてめとにようくふく
えゆれもあゆ

仙洞詩合 建暦三年 閏九月十九日

題

深山月 寒野虫 寄風雜

作者

丸

女房

順德院

大藏卿 藤原朝臣有家
後三位藤原朝臣家衡
宮内卿 藤原朝臣家隆
丹後守 藤原朝臣範宗

散位藤原朝臣行能

右

左近衛權中將藤原朝臣雅經

侍從藤原朝臣宣家

左近衛權中將藤原朝臣經通

俊成卿女

左近衛權少將藤原高家

侍從藤原光家

講師

判者

侍從藤原朝臣宣家

一番 深山月

龙勝

女房

月乃山色山嶺山之名野の處人や夜行の事

右

雅經朝臣

財氣行つるを也と称すとされ乍山のあくら故れの月
左寄多と神の祠敷也可謂冥相兼左寄する
又ゆうなうと云はゆともとくさり乍山とは
ト深山に雪ひきとやゆく事又奥むりも
もあくらと云ふ事ありたるよやゆ
うんひ左寄事

二番

龙勝

大藏卿

秋乃山絶月やと見そ覺つて萬城山の名の事

右

侍後

ちかがれ病と山を立ちあもひ枝めす葉すも月をまも
た上句恩意いやそもらえゆく称ともし寧へ
優りゆく

ちちくわの病と山にればまくあもか
こくすとゆくとゆくぬとてわうふよきうえ
仰うとうれあくなくやなうりみよれ月新
山乃ゆくまとくりきりきりくまうこうとおも
ひきみうり羽乃うきぬとゆう色だ見る
る勝

三番

左持

後三位

わ乃れ原さゆりむらとあらゆのて山を萬歳の

経通朝臣

右

ゆきひね一木あみすと吉野や立木と山をみの月
立ちととのひくと山せゆにとゆ月だけに
ときうやわくとくすとくすとやんさゆ見
ゆちよにゆくとくあうりいゆうとと優れ
約束ばうようり月の様ねの度やありとゆう
う紀山乃若川のあはくが隆翁きい色うう
いまや本の累のくすとくありとゆくとくは
うこれ山又耶日今日をやうのゆゆくゆよ
やあれううもとゆうりらと山のく耳が
もくわれや左持もスとくあ事ゆく称

四番

山詞

左勝

家督領官

月をとすめいとみやうり白雲れあえひせれひく安本に

右

俊成卿女

鳥の詠も本代かどもくぬみひらて月をとるにひ波とく神
おおきによろしくちみえ竹と波とくすの
さくととひくしりよせて月影とと先を
すみあらじとけりん誠よあくうそりゆりく
ゆきと勝とやをくやゆく

五番

左勝

範宗朝臣

峯吹み山の音のまばらみ月とわくにうふと那
右

高家

ちく雲れあみや月が月がよくくく秋のゆくを

六番

左

行徳御臣

君代

右勝

光家

柳れうきみよ雲消てなまむよわく月と川をよむる
左君代とくじつともう代をへる事もすくゆり
うじゆとおの娘のえ文字すまうきくすまう
ゆくん又松の葉梅の枝も常にみゆく紙とまう
すれてゆりむれ興とすくひきれてゆく
あくこ細めのあくとあめほくとく姉とく

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

七
番
寒
野
虫

龙
脯

女房

大

雅經錄

有りて未だあまきやとまでもあきらめ得
んともせひひとりのむすびおも
くゆきりて城内をあわせゆきめれ
てもすゞ御とゆきすれどもたる
ぬれどもれ山風ありてかゝるをいわ
んとあまき山あまき作もととある

八
卷

龙
脯

大藏卿

まくらの御みせれぬよ秋の夜のあそびの月の夜の月

卷之三

傳

秋乃葉野 れ面影あかりそんすすめの霧
東乃葉ふと
ひじやうりそよわにゆきをきくて深
ゆふさうりそよ
けんれきも風情
そよぐにゆくらむ
かうじゆうめくらむ

山同

九番

廣
本
復云復

右

經道朝臣

九

家學

東勝
俊郎卿女

3

後庭酒女

りの事あれば初第アラモの事は
何事ハシナヒトヨウニキヤリとれども
それゆきにあくまでも持てどもあ
るやうやう人多大ニルモア
ムニシテハシナヒトヨウニキヤリと
れどもあらむ

十一
奇

卷之三

素戔や東野の

右

初夏の頃は小猿アマツチのみとも思ひゆく松虫マツムシ乃ち
ち寄アタフる所をうかがひてよろこびやうなた
あとも静のをもつてゐる所で、さればやうふ

卷之三

卷之三

卷之三

初葉代
トヨウタ
ムラカミ

十二番

龙
脯

江
總

實也毛毛の事也ぬ御作とくのひらへる事はよしの間邊に

光家

ゆれあまよせれゑのとせあれたのすりね
くわゆくもじりあらきうあくも
めくわくはくわくもくはくわくもくはく
えよけり勝ゆく

十二書

九勝

女房

雅詠朝臣

右

右
雅經朝臣
島川すれを仰ぎまみち葉れちらぬ御と風うりゆゑ也
はくものあらをみのまれ背景も君う佛教となれや青葉はん
たるあるもとくいわより御くへゆう紙枕なり可よ
やすまくあられやんちあきらぬをゆうに
りも衰よりうと筑波根のあれとみと君うみ
をえらとくとくうきはあとせれゆもと御
ちすやくよ二うちりやううりゆん古え
とあとくとくとしこうゆくふよとくとわじし
きすげゆくひとくうりみ老
足ゆるやうだくかた高橋

十八
卷

仙派

左勝

大藏卿

乃ち此の事は
通じておれへ
あらわす秋風とゆ

七

詩後

萬葉乃の事あひ雪れ通歌よせく未だそ見林風とゆ
石
侍後

十五番

卷持

快云快

其後又作此詩以示之曰
我昔南歸日
子雲方草賦
自言生有時
不復見桑榆

七

卷之三

樂かばれ思ひをわね松風よとまきそがの聲すみよれ和
伊勢の木ぬ秋乃りつよ行くれ松のむらか
ばかれどちすのありづれかくらまきうち
みてゆ
ゆ

卷之三

都傳的活

右

俊秀印女

まことに彼の愛とその心を爲さうか此處の
はあ前よりおれのわがゆ

卷之三

範家稿

ちよわづのまよはくともせんじゆ

右

馬家

山高水下の本のまゝ散り松の木を以て附め
はあれりとくへ勝負みてゆく次右前
ある山風やとゆうかん

大番

丸持

行能

風の代りあらぬ風の巻きもあらざるまゝ

右

光家

かあらぬのちをやつまほ風の通りとけ代り雲の拂
あ前ひけ代風も叶うたり又あす一と風り
くわくわともちあくわまゆくやくこくや
ゆく

萬葉集畧解目録全二冊 尾州名古屋本町七丁目 永樂屋東四郎

此書を福の千蔭大人著せる累解の目録みく古より承認鳥の詳り
タゞさと初学の為に古云を行ふ訓と施し今之代よ通じ
易のしめもとを悉くの額をもて奉引成求むる便とキ簡教を
記し又授受奉付丁教をも並べ記しも頗る多の假字を五十韻に
ありと便讀を備へり今之訓點を熟讀し玉く古人の名をび
官名地名等の讀法をも説き古云の意をも解説せし

X-2-2
ニレ-2
東川

